

弁才天の性格とその変容

宿神の観点から

山田雄司

はじめに

弁才天は弁財天とも書かれ、福神とみなされて庶民の厚い信仰を受け、非常によく知られた天のひとつであることは、鎌倉の銭洗弁才天の例をもちだすまでもない。しかし、弁才天の学術的研究となると、他の庶民信仰と比べて思いのほか少ない。

この小稿では、弁才天の全容を述べることはできないが、まず最初に經典に見られる弁才天の原初的形態を考察する。經典に基づき図像が作製され、信仰も生まれるのであるから、この考察は欠かすことができないものである。そして、次に弁才天が神とどのような習合をみせるのか、そしてそのことよって、民衆に浸透していく過程を見ていく。さらには琵琶法師や管絃を家職とする家において、弁才天が守護神とみなされていくという観点から、弁才天が特定の職能民にとつての守護神すなわち「宿神」と意識されていく過程を明らかにする。

一、經典にみる弁才天

弁才天の根源はヒンズー教におけるサラスヴァティー Sarasvatī (saras = 水、sarasvatī = 水を持つもの、優美なもの) で、本来は

河の名前であったが、それが女神となったものである。二臂あるいは多臂で表され、前者の場合は左手に本を、右手に数珠を持ち、後者の場合には、その二つに加えて繩、ヴィーナ(琵琶)、水瓶などを持つている。そして、叡智の女神として、また学問や音楽の神として、今日でも学生や作家、音楽家などにとりわけ崇められている⁽²⁾。

それが漢訳經典では以下のように記される。『金光明最勝王經』⁽³⁾ 卷第七「大弁才天女品第十五」には、弁才天は『金光明最勝王經』の護法神として登場する。

白^レ仏言、世尊、若有^レ苾芻苾芻尼、鄔波索伽、鄔波斯伽、受持誦書写流^レ布是妙經王、如^レ說行者、若在^レ城邑聚落曠野山林僧尼住处、我為^レ是人、將^レ諸眷屬、作^レ天伎樂、來^レ詣其所、而為^レ擁護、除^レ諸病苦、流星變怪、疫疾鬪諍、法所拘^レ。

このように弁才天は諸眷屬を率いて天の伎樂を行なって『金光明最勝王經』を擁護し、諸病苦等を除く役割を果たしている。ここですでに伎樂との関わりが見られることが注目される。

若人欲^レ得^レ最上智、應當^レ一心持^レ此法、增^レ長福智諸功德、必定成就^レ勿^レ生^レ疑、若求^レ財者得^レ多財、求^レ名稱者獲^レ名稱、求^レ出離者得^レ解脫、必定成就^レ勿^レ生^レ疑、無量無辺諸功德、隨^レ其内心之所願、若能如^レ是依行者、必得^レ成就^レ勿^レ生^レ疑、

ここでは弁才天の陀羅尼を誦したならば、所願が成就するとともに、財を求めようとしたならば多くの財を得られるというように、弁才天が後に福德の仏とみなされるようになる根拠が記されている。

また、同書には、「常以八臂自莊嚴、各持弓箭刀稍斧、長杵鉄輪并繙索、端正樂見如滿月」というように、八臂であり、持物は弓・箭・刀・稍・斧・長杵・鉄輪・繙索といった武器で、戦闘神としての機能をも保持していることを記す。これは『別尊雜記』や『白宝抄』に図像が見られるが、宇賀神と習合した竹生鳥の八臂の弁才天坐像や江ノ島神社の八臂の木造弁才天坐像に繋がる一つの流れである。

弁才天の居所については、「或在山巖深險処、或居坎窟及河辺、或在大樹諸叢林、天女多依此中住」というように、河辺に居住することが記されているが、これは日本では弁才天は川や池や湖に祀られる場合が多いことに繋がるものである。

一方、一行の『大毘盧遮那成仏経疏』（『大日経疏』）「入漫荼羅具縁品」では、曼荼羅における諸天の配置について記した部分で、「西方近門置地神衆、次北置薩囉薩伐底、訊云妙音樂天、或曰弁才天、次北并置其妃」というように、サラスヴァティーのことを妙音樂天とも弁才天ともいうと記している。これをうけて『胎蔵旧図様』や『現図曼荼羅』では、胎蔵界曼荼羅外金剛部西方に琵琶を弾く二臂像として描かれる。

すなわち、違う經典に基づいて、八臂の戦闘神的な弁才天と二臂の琵琶を持つ弁才天とが形作られ、互いに影響関係を持ちながら変容していったのである。

奈良・平安時代にも、東大寺法華堂塑像弁才天立像や大阪孝恩寺の木造弁才天立像などの作例が残るが、大きな変化をとげていくのは鎌倉時代である。そしてそれは宇賀神との習合によってなされていく。

二、弁才天の中世的変容

『塵添搗囊鈔』卷第四「宇賀神事」には、宇賀神は、伊弉册尊から生まれた稲作をはじめ五穀や樹木の成育を司る保食神（ウケモチノカミ）と普通であるため、福神となったとされている。また、丹後国竹野郡船木里奈具村の奈具社に宇賀能売命が祭られており、そこに伝わる伝承が記されている。要約して記すと、丹波郡比治山の頂に麻奈井という井戸があり、そこはもと沼であった。そこに天女が八人下って水浴びをしていたときに老夫婦が一人の衣を隠し、天に帰ることができなくなった天女は二人の家で暮らすことになった。天女は十余年の間酒を作ったが、その酒を一杯飲むと万病が皆癒えるということ、人々はその酒をもらおうと財物を山のように持ってきたため、家は裕福になった。ところが翁は、天女に対して実の子ではないのだから出ていけと言って、天女は追い出され、奈具村までたどり着いた。そして後に宇賀女神として祭られることになった。さらに、

宇加ノ神福神ニテ翁カ家モ程ナクタクノシク成ニケルナルヘシ、保食ノ神ト此ノ神ト一ニカヨヒ玉ヘルニモヤアラン、蛇ヲ今ノ世ニ宇加ト云フハ、宇加神ノ蛇ハ形ニ変シテ、人ニ見エ玉フ心カ、実ノ蛇ハナニハカリノ福分カ有、

とあるように、宇賀神が蛇に変わって福神とみなされていたことがわかる。この伝承自体は、『丹後国風土記』をもとにつくられたことが明らかであるが、そこに登場する宇賀能売命が老夫婦を富貴にさせたことから福德神とみなされ、さらには蛇に変体するということを述べている。

弁才天と宇賀神の習合については、享保二年（一七一七）にまとめられた天野信景の『鹽尻』卷之四十九に興味深い記事が見られる。宇賀神とて頭は老人の顔にし体に蛇体に作り蛙をおさへたるさ

まして、神社に安置し祭る時には一器に水を盛、彼像を入、天の真名井の水なんいふ文を唱へて其像を浴す、像或は金銅または磁器也、

熱田正殿の内に御冠宮の中に彼像有し、真享御修理の時取出せし、これははりぬきのいとたくみなる作なりし、

按に宇加耶は梵語にして白蛇と訳す、されはもと密家の修法にして神人伝へて此法を修せしと見ゆ、されとも其像密宗に製する所は彼人首蛇身の像には侍らず、亦俵の上に蛇を作りこれをも宇賀神といふ、

山城国稲荷の社に此形あり、熱田の宝蔵にも磁器の此像侍る、いとふるき物也、

此等中世我国の人作為せし事と見え侍る、亦蛇首人身の像も有て修験者なとまつる、

ここでも宇賀神と丹後の真名井との関係が見られるが、宇賀耶が梵語であつて白蛇を意味するものだとされている。そして稲荷神との習合も見られる。『中右記』嘉承元年（一一〇六）十二月七日条には、「早旦、檢非違使資清、為別当使入来云、近隣可有追捕之事、可用意者、乍驚問東門相待之処、富小路東小屋也、是年来居住老女、或称祭蛇、或称祭狐、好色諸女深信此事、誠以成市、詐取入宝貨、聞已及高、今日已被追捕云々」というように、好色の老女が蛇と狐を祭り、人の財貨を掠め取つて富貴になつてゐることを記している。宇賀神と稲荷神との関わりは原型となる蛇と狐との関わりは以外とはやい時期から起つてゐるのかもしれない。また、一般に蛇が神社の社頭に現れると、怪異とみなされて奉幣が行われるが、これらの問題の考察に関しては他日に譲りたい。

智積院第七世の能化職を辞した運敵が元祿四年（一六九一）ころ編纂した『寂照堂谷響続集』卷之五「杜撰弁才天経」には、

客問、世号「弁才天経」者凡有五本、一題云、仏説最勝護国宇加耶頓得如意宝珠陀羅尼経（説釋）、二題云、仏説即身貧転福德

円満宇賀神將菩薩白蛇示現三日成就経（作説）、三題云、仏説宇賀神王福德円満陀羅尼経（説釋）、四題云、仏説大宇賀神功德弁才天経、五題云、仏説大弁才天女秘密陀羅尼経（作説釋）、此五本経古来有疑、亦為「杜撰」耶、

答、何及「猶豫」、本邦中古杜撰者所造、何以言之、（後略）

というように、弁才天のことを記した五本の経典は日本で作つられた偽経であるとみなしている。その一つ「仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼経」について、やや長くなるが引用しておく。

今此会中有「神王」、名曰「宇賀神將」、從「無量劫」以來、修「習大慈大悲」、為「一切衆生」、作「大良福田」、汝等速可「修習此神王法」、菩薩六度最初、一切衆生命根、必當「得成」就「一切真言」、及「經論等義理」、説「此言」已、宇賀神王從「座中」顯現、其形如「天女」、頂上有「宝冠」、冠中有「白蛇」、其蛇面如「老人」眉目、此則每「諸仏出世」奉「奉」逢、利「益衆生」、年久瑞相、復此神王、身如「白蛇」、如「白玉」、有「八臂」、左第一「鋒」、第二輪宝、第三宝弓、第四宝珠、右第一「劍」、第二「棒」、第三「鎗」、第四箭、頂有「如意宝珠」円光、復有「十五王子」、其形童子、或時面所持「三摩耶」、或同執「如意珠」、圍「繞神王」左右、爾時宇賀神王、為「人天」故説「最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠王根本大陀羅尼」、曰、

（中略）

宇賀神王説「此呪」已、而作「此言」、若有「人」每日誦「一百八反」、成「就如意宝珠王之法」、雨「宝高」梵天宮、唯非「得」福田、降「伏一切之魔」、二世之所願円満、復一切怨敵退散、一切諸人愛敬、復因「此呪力」故、檀度等、六波羅蜜得「満足」、必疾「可得」阿耨多羅三藐三菩提、何況滿「百万遍」功德乎、

ここでは持物に輪が加わつてゐるが、鎌倉時代に弁才天が福德神とみなされるようになる、財宝を手に入れるための鍵が持物となるのである。そして宇賀神の陀羅尼を唱へることによつて福田¹¹功德を手に入れることができるばかりでなく、一切の魔を降伏して二

世にわたる所願円満が保証されるとされている。

これらの偽経は、根立研介氏の指摘にあるように、金沢文庫の『仏説宇賀神将十五王子獲得如意宝珠経』が弘長元年（一二六一）の奥書を持つことや、文保二年（一一三二）六月の自序のある天台僧光宗の『溪嵐拾葉集』巻三十六「弁財天法秘決」に、「円満陀羅尼経一卷、神将陀羅尼経一卷、宇賀長者経一卷、十五王子経一卷」と書かれているので、鎌倉中期ころまでには成立していたものと思われる。

また、『看聞日記』応永二十三年（一四一六）七月二十六日条には、興味深い記事が書かれている。

又或説、京下方ニ住男、宇治今伊勢へ参詣シケルニ、社頭辺白蛇アリ、此男扇ヲ開テ、若宇伽ナラハ此扇へ来ルヘシト云ケルニ、此蛇扇ノ上ヘハイノホリケレハ、悦テ裏以テ下向シケリ、サテ家ノ乾ノ角ニ安置シケリ、而不慮ノ外ニ物出来テ、人モ物ヲ借シ賜ナトシテ心安ク成ケレハ、宇伽神ナリトテ仏供ヲ貴敬シケリ、

宇伽神を家に安置したおかげで富裕になった家について記すが、妻が昼寝している間に蛇が妻の上に乗っているのを見た男が、太刀を抜いて蛇を追い払ったところ、「其後ヨリ又スカスカト貧窮ニ成ケリ」というように、もとの貧乏に戻ってしまった。これによつても弁才天＝宇伽神が福德の神とみなされていたことがわかる。

そして、天川（紀州）・厳島（安芸）・竹生島（江州）・江島（相州）・箕面（摂津）・背振山（肥州）が六所弁才天とされて信仰を集めていくが、八臂の弁才天は主として財徳神としての展開を見せる一方、二臂の弁才天は音楽神とみなされて、音楽を行なう人々の間で守護神とされていった。『溪嵐拾葉集』巻三十六「弁財天法秘決」には、

尋云、法花ノ中説「弁才天」耶、

答、一義云、弁才天者又名「妙音天」、若爾者妙音菩薩是也、

又一義云、美音乾闥婆王是也、其故大日経疏釈「妙音天相」、

妙音者乾闥婆類也、乾闥婆者楽人也、妙音天又楽人也、仍可合之也云云、

というように、弁才天は妙音天とも妙音菩薩ともいい、乾闥婆の類であるという。乾闥婆とは、歌神の緊那羅とともに天童八部衆の一つにかぞえられ、興福寺などに作例が残っているが、仏徒以外にはそれほど広がりは見せていない。

三、宿神としての弁才天

『普通唱導集』雑修善には弁才天の功德について以下のように載せている。

惣徳如常、別功德者一切才芸尤巧、無量財宝亦妙、以「孔字」為「種子」、孔字諦不可得字也、諦者審実不虛之義、仍一切芸能尤明尤鮮、諸事作齊同満、曰、足或具「八辟」今是指「琵琶」、此琵琶者能調「呂律之声」、專掌「陰陽之氣」、四絃一声誠是表「四海一天之安全」、千調万撫、亦復為「千秋万歳之福貴」者也、凡厥功德得不可称矣、

すなわち、弁才天は芸を上達させることと財を蓄える点に関して特に功德があり、弁才天の持つ琵琶は千秋万歳の福貴を寿ぐものであるという。これは琵琶法師と祝言を唱える門付芸との関連をうかがわせるものである。ここでは「琵琶法師」という語は見られないが、琵琶が「為千秋万歳之福貴者」とみなされていることから、遍歴する琵琶法師の姿を浮かべてもよいだろう。琵琶法師は蟬丸を祖神としていたが、鎌倉中期には守護神としての弁才天＝妙音天を付け加えていたものと思われる。これは二臂の弁才天が琵琶を所持していることにより、琵琶法師が「祖神の理論化」をはかり、自らの地位の向上をはかっていく段階において、仏典の中に典拠を探し求めていったとき、最も似つかわしいものとして弁才天が選ばれたに違いない。

また、三味線をたずさえて諸国を遍歴する瞽女も、妙音講を催し

て弁才天を供養していることが指摘されている。また、佐久間惇一氏の引用する『警女式目』には、警女の守護神として妙音菩薩・弁財天・下加茂大明神があげられていることから、琵琶法師からの影響がうかがわれる。

兵藤裕己氏は琵琶法師の弁才天信仰が鎌倉時代まで遡ることができるとして、その傍証として『一遍上人絵伝』の江ノ島の対岸の片瀬浜に登場する琵琶法師をあげている。兵藤氏は、江ノ島には竜蛇を鎮め、自らも竜蛇である弁才天が祀られ、琵琶法師がその荒ぶるモノ（竜蛇）をまつり鎮める役割を果たしているから、その場面に描かれるのが似つかわしいとして、琵琶法師が『江島縁起』を語ったのではないかとしている。兵藤氏の一貫した「鎮魂としての琵琶法師の物語」という説には魅力を感じるが、『一遍上人絵伝』の片瀬浜に登場する琵琶法師をそのような存在ととらえてよいのだろうか。

『一遍上人絵伝』では他に琵琶法師が登場する場面としては、巻一では一遍が善光寺本堂に入ろうとしている場面、善光寺の裏で琵琶法師が一人の童子を携えて歩いており、その異形性からか犬に吠えられている。そして、問題となっている巻六では、片瀬の浜に踊り屋がつくられて時衆による踊り念仏が行なわれ、見物人が多数取り巻く外側に琵琶法師が一人の童子を携え、そのにぎやかさに驚いている様子である。

天曆二年（九四八）に文章博士となった橘直幹の逸話を、『十訓抄』をもとに鎌倉後期に描かれたとされる『直幹申文絵詞』では、琵琶法師が鳥居の下に筵を敷いて座って琵琶を弾いている。また、鎌倉時代後期に描かれた『法然上人絵伝』の第十七巻で、建保二年（一二一四）正月、法然の三回忌の追善供養のため真如堂で聖覚法印が説法をしている場面、聴衆に交じって琵琶法師も縁でそれを聴いている。

以上のように、絵巻物において琵琶法師が描かれている場面は、しばしば宗教施設や宗教行事に関係していることが多い。これは、

琵琶法師が寺社の境内で平家を語ることがよくあったことと関連するものである。琵琶法師が登場するのは非日常的な場所や時間、さらに言えば境界的要素を含む場面であり、絵巻物を描く場合もそこにふさわしい存在として琵琶法師を書き加えているものと思われる。片瀬に見られる琵琶法師を、他の場面に見られる琵琶法師から切り離して弁才天と結びつけるのはやや強引である。しかし、琵琶法師が弁才天と妙音天を守護神として崇めていたことにはかわりはない。

さらに室町時代になると、公家の間で琵琶を弾くとき、妙音天の像を掲げて守護神としている例が見られる。それが山科家と伏見宮家とに伝わった妙音天であるが、以下、荻野三七彦氏の考証に導かれながら論を進めていきたい。

山科家は藤原氏北家四条家の庶流であるが、室町時代の教言による『教言卿記』をはじめとして、山科家記録の中には芸能に関する記事がしばしば見られる。

『教言卿記』応永十二年（一四〇五）六月十七日条には、琵琶の家藤原孝道の子孫の孝継が訪ねてきて、教言と楽物語をしたが、西園寺の木像で蓮葉の上にいる妙音天は尾張国からもたらされたものであることを述べている。

孝継朝臣来之間、楽物語、与一盞也、抑西園寺ノ妙音天事、上古妙音院之時、尾張国ヨリ于時彼孝道朝臣負申之奉入云々、木像蓮葉ノ上座御云々、珍重々々、奇特々々、

そして、応永十三年九月十九日は妙音天の縁日で、さまざまな楽が催されている。

妙音天御縁日重日、旁以楽一座張行、笙教豊・幸秋、箏・篳篥・笛・教高・景親、琵琶孝継朝臣、大鼓為秋、盤涉調、宗明楽・万秋楽序・同破・蘇合三帖・同急・輪台青海波・千秋楽、

妙音天を前にして笙・箏・篳篥・笛・琵琶・太鼓が奏されていることからわかるとおり、妙音天は琵琶を奏するときに祀られるだけでない。

く、音曲全般にわたつての守護神とみなされていたのである。妙音天の縁日は応永十四年五月十九日にも行なわれるが、そこでは「楽張行、今日ハ殊更妙音天縁日之間、且幸秋所持本尊、後光嚴院宸筆借渡懸之」というように、笙の家である豊原幸秋の所持する後光嚴院宸筆讚の妙音天像が本尊として掲げられたのであった。

山科家では、妙音天を他家から借りて楽を行なっていたのでは家の権威にも関わるといふことで、西園寺妙音堂の妙音天を書写して自家に安置することになる。

応永十四年六月六日条には、「妙音天本尊事、土左將監行広申付、絹如本二尺六寸遣之、功程三十疋云々」というように、絵所預土佐行広に命じて絹本の妙音天像を描かせている。それは六月十九日には完成するが、「是本ハ西園寺ヲ写止、孝継所持本也」というものであり、九月二日条に「孝継朝臣来、妙音天拝見、殊勝之由、此本尊絵ハ西園寺妙音堂秘本也、而今川入道写置之、其ヲ故孝重三位写之本ヲ、孝継朝臣出之間、絵所土左將監行広写書之、可秘藏者也」とあるように、西園寺→今出川入道→藤原孝重→孝継と転写されてきたものであった。そして山科家でつくられた妙音天像は後小松天皇宸筆の讚をいただき、法楽の際に掛けられることとなった。

山科家では代々妙音天像が受け継がれて法楽が行なわれていたことが、『言国卿記』などから確かめることができる。『言国卿記』文明七年（一四七五）三月十七日条には、妙音天法楽の結願日であったが、「青海破ノ半ニ妙音ノ下ヨリ四寸斗ノムカテ出来也、近比ノ事也、祈禱シヤウシユノスカタ歟、今日結願ナリ」というように、妙音天がムカデの姿で登場しているのは興味深い点である。また、山科言国自身、真如堂の弁才天にしばしば参詣して芸の向上を願っている。

その他、妙音天像は、『教言卿記』応永十四年九月三日条から花山院家に、九月廿二日条から鶏が頂上にあるものが正親町三条公雅邸にあったことがわかる。妙音天を前にしては、礼拝して般若心経

を読み上げ、楽が奏されているが、これらは和歌の柿本人麻呂影供と似たようなものであったと思われる。応永十四年九月二十一日条には、「妙音講式」が行なわれたとあるので、これまた仏教的儀礼が付加されたものであったに違いない。

さきほど、妙音天は音曲全般にわたつての守護神とされるということ述べたが、それにともない、妙音天の図像も琵琶を持つものだけでなく、さまざまな楽器を持つものが作られている。『言国卿記』文明十三年三月十五日条は、虫食いが多くて全文の意味がとりにくいが、「等笙ヲハシメテ管絃ヲ ヲ 書也、メツラ 不思儀ナルカントク也」というように、笙をはじめとして管楽器・弦楽器を持つ物としていたことがわかる。

また、『看聞日記』応永二十六年七月二十六日条には、「抑去廿日仙洞有御楽、妙音天被奉新写（伏見宮御書）、為御法楽有秘曲」とあり、仙洞御所での御楽のために新しく描かれた妙音天像は筆を弾く絵像であった。このように、需要に応じて妙音天はその持物を変えていくのであるが、このことは妙音天に限らず、仏像一般に言えることである。

妙音天はまた、伏見宮でも持仏堂の本尊として重視され、音曲を奏するときには本尊として掲げられた。伏見宮家は崇光天皇の第一皇子荣仁親王に始まる宮家であるが、宮内庁書陵部所蔵の『伏見宮記録文書』には妙音天に関する記事が散見される。「御本尊妙音天像事大通院御記」と包紙にある荣仁親王自筆の記録には、妙音天が紛失したときのことか記されているが、その最初の部分では、伏見宮家の妙音天像は西園寺のものを書写したものであることが記されている。

本尊妙音天紛失間事愚記

妙音天画像一幅（伏見宮御書）、是則西園寺第二伝之尊像也云々、妙音院太相国彈琵琶之時被合妙曲之見于裏書矣、尔来誰人所伝哉未（伏見宮御書）知来歴者也、崇光院御時或者商買之、仍

被_レ召留_レ新被_レ加表補訖、

(中略)

応永八年七月四日、此本尊日來入_レ函奉_レ安置持仏堂、依_レ為_レ炎暑時分、為_レ蟲弘_レ欲_レ奉_レ出_レ之処、忽_レ求_レ失、乍_レ驚方々雖_レ令_レ搜索_レ不得_レ之、為_レ盜人失却_レ之条勿論也、御所中之輩可_レ致_レ嚴密糾明之沙汰_レ之由存_レ之、爰承_レ仕_後聊立_レ嫌疑之子細_レ歟、彼者今朝出京云々、然而真偽未_レ決、暗然之外無_レ他、抑今夜丑終剋、伏見仙宮弘_レ地焼亡、数字仏閣及持仏堂本尊以下悉以成_レ灰燼_レ畢、愁歎之至何事如_レ之哉、但彼本尊免_レ此災殃、冥慮定有_レ子細_レ歟、

妙音天は本尊として持仏堂に安置してあったが、応永八年七月四日に虫弘をしようとして出そうとしたところ、盗まれていた。ところがその夜、伏見宮は火事にあい、持仏堂も焼けてしまった。妙音天はおかげで消失を免れることができたのだが、それは神慮という他はない。後に妙音天は見つかり、元のように安置されるのであった。

芸道の家にとつては、その守護神の存在は家の存続に関わることであった。『看聞日記』応永二十八年(一四二二)一月三日条には、音曲を技としている源信俊の子孫であり、養子に行つた綾小路少将資興が亡くなつてしまい、技を伝授することもできなくなつてしまつたが、「道神」の加護があるので家業の断絶はあるはずがないと記されている。

源宰相家業無_レ相統之人躰、相公已及_レ六十餘_レ之間、縦猶子雖_レ出来_レ、音曲相統不_レ定事也、郢曲可_レ断絶_レ歟、為_レ朝為_レ家驚歎無_レ極、但道神有_レ加護_レ者不_レ可_レ断絶_レ歟、「道神」とは具体的に何をさすのか明らかでないが、家業の守護神あるいは守護仏は家の存続のためには欠かせないものだったのである。

また、『看聞日記』応永二十四年(一四一七)四月十九日条に、「平調曲七、妙音天奉_レ法楽、長資朝臣吹_レ笙」と見えるのを始め、音

楽が奏でられる際は妙音天が掛けられている記事が散見される。このことは人麻呂影供の場合と同じように妙音天が音楽の守護神とみなされていることを意味する。

さらに興味深いことは、妙音天が柿本人麻呂と習合していることを示す記事のあることである。中世の古今和歌集の注釈書にはさまざまな興味深い解釈を載せているが、永仁五年(一一九七)三月十五日の奥書のある『古今集註』には、柿本人麻呂が妙音天の化身であることを記している。

口伝云、妙音菩薩化身也、赤人は勢至菩薩化身也、勢至菩薩_{釋迦}は我朝所_レ成_レまします故_レ化_レ身_レ赤人_レ出生の所を_レもいはず、命終の所を_レもいはずと云々、人丸儀軌云、欲_レ得_レ歌道_レ枕_レ辺_レ懸_レ我_レ影_レ毎日卯時_レに汲_レ卯方水_レ備_レ供具_レ、ほのほのと云歌三反唱へて南無妙音菩薩と百反唱へは、遠くは三年、近くは三月か中に其証理をあらはすへと云々、六条修理大夫顕季、此人丸をか、れるに本地の妙音菩薩と垂迹の人丸とを一鋪_レ書奉_レり給ひけるか、妙音をは座席を高く人丸をは座席をひきく、絵師して書て供養せんとせし時、俄に辻風吹来ていつちともなく吹行、

ここでは、顕季が人麻呂影供のときに妙音菩薩とその垂迹である柿本人麻呂とを一枚の画像に描いたとしている。人麻呂を妙音天と結びつけて理論化していくのは、鎌倉中期になつてからのことであろう。

同じく歌論書であり、藤原定家に仮託され、実際は鎌倉後期に記されたとされる『三五記驚末』には、「此人(柿本人麻呂)は妙音菩薩の化現とやらんぞ申たる」とあり、どちらも妙音菩薩の垂迹が柿本人麻呂であるとしている。これらことから、妙音天が音曲の守護神であるということが拡大解釈され、芸道の守護神とみなされるほどに信仰されていたことがわかる。

さらに、『鹽尻』卷之四十七には、「柿本人麻呂は平城天皇の御時夢の告げによつて、大同二年七月十三日人丸の霊を近江国竹生島に

崇むと云々、延喜二年七月十八日に人丸の靈を代々大内竹のつほに
崇む、今の御影の祠これなりと云々」というように、柿本人麻呂が
竹生島に祀られたことを記している。これは柿本人麻呂が妙音天¹¹
弁才天と同体であることみなされてきたからにはかならない。

このように弁才天は、琵琶を奏する人々にとつての守護神という
役割から、広く音楽の守護神、さらには芸道の守護神にまで拡大解
釈され、それに伴い、凶像も変化していったのである。

終わりに

以上、弁才天の經典に見られるあり方を考察した上で、中世以降
いかにしてそれが琵琶法師や音楽を事とする家に取入れられていっ
たのかについてみていった。そしてそこには、鎌倉期における祖神
の形成と理論化という重要な問題が潜んでいるのである。

弁才天自体の問題としては、それが日本にどのように分布し、い
つ誰によって祀られ、どのような祭祀が行われているのかを探るこ
とは、文化の地方展開の問題だけにとどまらず、地域権力の確立の
問題に関しても重要な視点となるであろう。この点については、こ
れまでの弁才天研究が主に美術史の面から行われてきたということ
にもより、ほとんど顧みられていない。

一方、弁才天を宿神という面から考えた場合、日本人の神観念を
考察する上で、重要ながら欠如している、諸職における祖神形成と
いう点に関して、この拙稿がその説明に向けてのささやかな手がか
りとなれば望外の喜びである。

註

(1) 根立研介『日本の美術』第三一七号 吉祥・弁才天像(至文堂、

一九九二年)に弁才天について適格にまとめてあり、小稿もこ

の論著に拠るところが大きい。

(2) 立川武蔵・石黒淳・菱田邦男・島岩『ヒンドウの神々』、せり
か書房、一九八〇年。

(3) 『大正新修大蔵経』第十六卷経集部三。

(4) 『大正新修大蔵経』第三十九卷経疏部。

(5) 『大日本仏教全書』纂集部二。天文元年(一五三二)成立。

(6) 『日本随筆大成』第三期九卷。

(7) 『大日本仏教全書』第九十四卷纂集部三。

(8) 京都大学附属図書館所蔵。明治十一年京都市木屋町二条貝葉書
院蔵版。『仏説最勝護国字賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』、『仏説宇
賀神王福德円満陀羅尼經』、『大弁才天女秘密陀羅尼經』を載せる。
同図書館にはまた、貞享三年(一六八六)上野州黒瀧嗣祖沙門
潮音選述の『弁財天三経畧疏』が所蔵されている。弁才天経の
中でもこの三経が流布していたらしい。

(9) 『大正新修大蔵経』第七十六卷統諸宗部七。

(10) 『妙音菩薩』の例は、『妙法蓮華経』巻第七に、『妙音菩薩、於
二万二千歳、似二十万種伎楽、供養雲雷音王仏、并奉二上八
万四千七宝鉢』とある。

(11) 蟬丸を祖神としていく過程については、拙稿『蟬丸説話の形
成』(『日本文化研究』五、筑波大学大学院博士課程日本文化
研究学際カリキュラム、一九九四年二月)を参照されたい。

(12) 佐久間惇一『譬女の伝承文芸』講座日本の民俗宗教七、
弘文堂、一九七九年。

(13) 『平家物語』における芸能神―建礼門院物語・試論―『国
文学解釈と鑑賞』第五三巻九号、一九八八年九月。

(14) 『物語―触穢と浄化の回路―』『物語・差別・天皇制』、五
月社、一九八五年。

(15) 『西園寺の妙音天像』『古文书研究』十七・十八、一九八一年
十二月。

(16) 応永十六年五月十九日条にも妙音天縁日の記事が見られる。

そのときには新調の本尊が懸けられている。

- (17) 『史料纂集』の『教言卿記』第二では、今川入道を「貞世〇了俊」としているが、萩野氏の書かれるとおり、今出川入道とするのが正しい。なお『大日本史料』でも今川貞世としてゐる。

- (18) 『教言卿記』には「三条公雅相公妙音天トテ求出送給、鶏頂上事不審之間、毗沙門堂美百尊正、此本尊遣之、以教有少將相尋之処、金曜星之由有意見、首載鶏、持琵琶、金曜星勿論云々、妙音天形像六臂八臂等云々、種々雖有異説、載鶏形像曾無之云々、所詮此像月輪中書之、金曜星無疑歟」とあり、鶏が頂上にある像を金曜星像とみなしている。

『梵天火羅九曜』（『大正新修大藏經』第二十一卷密教部四）には、金曜星の像を載せ、それは『教言卿記』の説明と一致するとともに、「形如女人、頭戴首冠、白練衣引絃、与人為患、国王常以仲秋之月用生錢祭之、行年至此星、宜著白衣、醮謝本命元神作福田、大吉也」との説明がされている。琵琶を持つ女性像ということから、弁才天と金曜星とは混同されることがあったようである。

- (19) 京都大学国語国文学資料叢書四十八。藤原定家の孫為相によるもの。仏教教理に基づいた説明が顕著であり、説話による説明が多いことが注目される。

- (20) 『続群書類従』第十六輯和歌部。

〔付記〕 本稿脱稿後に塩澤寛樹「弁天五部経と弁才天―江島における事例から考えて―」（『藤沢市史研究』二十七、一九九四年三月）を得た。弁天五部経の考察について重なる部分もあるので参照されたい。